

Title	『微光』総目次と解説
Sub Title	The contents of and comments on the "Bikō"
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1966
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.39, No.3 (1966. 3) ,p.42- 53
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19660315-0042

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

『微光』総目次と解説

中村勝範

一、総目次

第一号 (大正三年十月二十日)

発刊の辞

『微光』の発刊を賛し

愛の話

ユダヤの老爺

芋

五思ひ草

『微光』の発行を祝す

編輯便り

郷故へ

第二号 (大正三年十一月二十日)

愁の話

白倉甲子造

渡辺政太郎

K 生

モウパッサン著

碧浪山人

草水山人

岩脇みづ草

若林八代子

タヌキ生

K

〈忍辱経他の抜萃〉
(註1)

ヘルメット夫人

秋

嗚呼吾が村

都帰り

発刊を祝す

〈短歌 六首〉

四方の友より

一口噺

編輯便り

第三号 (大正三年十二月二十日)

着物の話

発刊を祝す

ヘルメット夫人

モウパッサン著
碧浪生

北風生

草山人

萩の舎

斎藤兼次郎他

ツムシ曲生

碧浪

霜の里人

モウパッサン著
碧浪生

晩秋

さらば虚偽の都よ

自暴自棄の友よ

村住居の楽み

微光出づ

発行を祝す

四方の友より

編輯便り

〈歌一首〉

お仲間評判記

第四号（大正四年一月二十日）

チブシーの話

神の子

土より土に

水飲百姓

戦争と平和

二人の子供の対話

北国の冬

貧の囚人

百姓のたはごと

雑感

與太三題

甲斐の浪人

幸内秀夫

北風生

草水生

微々生

日笠與八

花村生他

碧生

北風生

碧生

〈読者からの便り〉

編輯便り

寄贈目録

第五号（大正四年二月二十日）

田吾作演説の一段

神の子

山中の生活

偶感

梅ごよみ

通信欄

妻の死亡せし友を訪ふ

お仲間評判記

第六号（大正四年三月二十日）

夢の話

神の子

友より

〈歌一首〉

楽しき田園生活

面白はがき

雑感

津軽林檎

北風

北風生

碧浪

久保田天民共作

渡辺北風生

草水生

片山潜他

渡辺北風生

碧浪

孤峰生

白倉碧浪

北風

石川旭山

高田集蔵

北風生

草山人

『微光』総目次と解説

希望
編集便り
寄贈目録

団 栗 生
北 風

朝草
皮肉と諷刺の価値
自然と人
編輯便り

草 水
天 空
北 風
碧 浪、北 風

第七号 (大正四年四月二十日)

選挙の話
神の子
労働詩
二個の怪物
〈歌一首〉
闇に浮ぶ蒼い顔
北海の鯨
情死
納屋の窓に
友より
編輯便り
寄贈目録

K ジェムス・アルマン
白倉 碧 浪
草 水

北 風 生
北 風 生
幸内 秀夫
北海の志郎
甲 子 生
黙 怒
孤 独 生
K生、碧浪、北風生

第九号 (大正四年六月二十日)
巖穴遺稿・入郷記
地上の平和
田園雜詠
鎮神の祭
田園の友を訪ふ(上)
日本の労働者諸君
民の徳
海外に在る友より
編輯便り
お仲間評判記

白倉 碧 浪

第八号 (大正四年五月二十日)

近來の感想
破律
地上の平和
社会劇・黒濛沫

北 風
豊 年
白倉 碧 浪
海 野 幸 勝

註1 題名のない記事はへゝにし、その中に記事の内容を記した。
以下同様である。

二、冬の時代の『微光』

明治四十三年五月の「大逆事件」以後、社会運動は「冬の時代」、「窒息の時代」に入つた。その中から友愛会は大正元年八月一日に

草 水
北 風
山 田 甲 八
碧 浪 沢
石川三四郎
碧 浪、北 風
北 風

眞上げしたことはすでに周知のところであり、同年十月には大杉栄・荒畑栄村が『近代思想』を発売したことも知られたつてゐる。大正三年一月には堺利彦によつて月刊文学雑誌『へちまの花』が創刊されたことも、この方面の研究者で知らない者はいない。しかしながら冬の時代の社会主義者、労働運動家の活動といへばこの程度のことしか知られておらない。冬の時代は社会運動の「窒息」させられた時代であるというので、それはまつたく手も足もでないまでに息の根を止められてしまつたかのごとく考えるのか、研究者のこの時代の研究はまつたく空白のままにとりのこされているといつてよい。

しかしながら大逆事件以後、一段ときびしさと精確さを増した当局の調査報告書によれば、冬の時代でもその時代なりの活動があつたことが克明に記されている。たとえば極秘文書である『特別要視察人状勢一斑』^(註1)は大正三年七月より同四年六月までの一年間にわたる特別要視察人状勢の一斑を叙述せるものであるが、そこには全国に一、二五一名の特別及び準特別要視察人がおつたことが記録され、その主だつた人々の活動も報告されている。また社会主義者の機関紙誌、もしくは機関紙誌とまではいかなくとも「同志」消息ヲ掲ケ或ハ普通選挙ヲ云為シ或ハ資本家労働者階級ニ関スル記事ヲ叙シ或ハ労働者ノ状況ヲ述ヘテ之カ自覚ヲ促ス等注意ヲ要スル記事ヲ掲載スルモノ尠カラサルヲ以テ此ノ重ナルモノト共ニ左ニ其ノ要項ヲ示スコト、^(註3)として左の如く揭示されている。

左表以外に「東京在住者大杉栄、荒畑勝三ノ発行セシ『近代思想』」大正三年九月一日廃刊号(第二卷第十一号、第十二号)ヲ出シ兩名

『微光』総目次と解説

府県	題名	発行区分	初号発行年月	経営者又ハ重ナル関係者	備考
東	東京新聞	日曜発行	明治四十三年九月	藤田貞二、土倉宗明	
	へちまの花	月一回	大正三年一月	堺利彦	
京	微光	月一回	大正三年十月	渡辺政太郎、白倉甲子造、白倉静造	白倉兩名ハ兄弟ノ間柄ニシテ埼玉県在住者ナリ
京	労働者	月一回	大正四年五月	荒畑栄、勝三、宮島信国、吉川守国	主義宣伝ノ機関ト認ムヘキモノ
京都	へいみん	月一回	大正三年七月	上田巖善	
大	村落通信	月二回	明治四十五年一月	高田集造	
阪	煙	月一回	大正四年五月	横田宗次郎	
神	解放	月一回	大正四年四月	大杉栄、勝三、中村勇次郎、伊藤公敬	主義宣伝ノ機関ト認ムヘキモノ、加藤治兵衛、大杉栄及荒畑勝三、東京在住者ナリ
川	解放	月一回	大正四年四月	伊藤公敬	京在住者ナリ

ハ同年十月十五日ヨリ新ニ『平民新聞』(月一回)ヲ発行セシカ是亦四年三月十五日発行第六号限ニテ廃刊シタルヲ以テ、^(註4)とされており、『近代思想』、『平民新聞』以後は社会主義宣伝の機関として見るべきものは「解放」および「労働者」であるとされている。したがつて、ここで紹介する『微光』は社会主義者の機関紙ではないが、『へちまの花』と同様に要注意の発行物とされていたわけであつた。

『微光』および『微光』を発行していた白倉甲子造に対する当局

の評論はつぎの通りである。

雑誌微光ノ発行

埼玉在住白倉甲子造ハ東京在住渡辺政太郎ト相謀リ発行所ヲ東京ニ置キ大正三年十月二十日ヨリ「微光」ト題スル雑誌ヲ発行シ主トシテ貧富ノ懸隔労働問題等ニ関スル記事ヲ掲ケ各地ノ同志ニ之カ購読方ヲ勧誘シツ、アリ^(註5)

白倉甲子造(農業)ハ在京同志ニ多クノ交際ヲ有シ殊ニ近來ハ渡辺政太郎ト深ク親交ヲ結ヒ同人ト相謀リテ大正三年十月二十日ヨリ雑誌「微光」(発行地東京)ヲ発行シ貧富ノ懸隔労働問題等ニ関スル記事ヲ掲ケ広ク同志間ニ之ヲ頒布シ居リシカ同四年五月二十日第八号発行後廃刊ノ状態ニ在リ、本人ハ大正五年一月三十日夜弟静造(無職)カ自宅ニ於テ小学生徒十数名ニ対シ羅馬字ノ教授中陰謀事件刑死者幸徳伝次郎ノ写真ヲ示シ「之ハ幸徳秋水ト称スル偉人ナリ曩年死刑ニ処セラレタルモ全国第一位ニ在リシ人物ニテ巡查十数名ヲ殺シ国家ノ為ニ尽シタルモノニシテ吾々ノ敬慕シ居リタル此ノ人ヲ失ヒタルハ誠ニ遺憾ナリ云々」ト説キタル後以上ハ決シテ口外スヘカラスト堅ク兒童ヲ戒メタリ^(註6)

右の当局の調査書中二点につき注意する必要がある。まず『微光』は大正四年五月二十日の第八号で廃刊となつてゐるが、大正四年六月二十日に第九号を出し、これで廃刊された。第二点は白倉甲子造は弟静造宅に小学生を集め幸徳を全国第一位の人物なりと説い

たとあるが、これは事実無根であるようだ。白倉氏は「私の弟で社会主義者だつた静造がやつていた塾で、ユージョの『ああ無情』を例にあげ、如何に努力しても世間というのはつめたいものだというようなことを説明したが、幸徳についてしやべつたこともない。第一そんなことを子供に話したつてわかるはずがない^(註7)」といつてゐる。

註1 近代日本史料研究会編『特別要視察人状勢一斑 統一』(明治文献資料刊行会 昭和三十四年五月)

註2 右同 一七頁

註3 右同 一八頁

註4 右同

註5 右同 一一四―一五頁

註6 右同 二七〇頁

註7 埼玉県労働部労政課編『埼玉県労働運動史 戦前編』(埼玉県労働部労政課 昭和四十年一月)六一頁

三、白倉甲子造と

『微光』発刊から廃刊まで

『微光』は、大正三年十月二十日の日付をもつて創刊号が出された。タブロイド版四頁であつた。創刊号四頁の末尾には次のように記されている。

一部郵税共二銭 十部同十五銭
本紙定価 二十部同三十銭 五十部同五十銭
一ケ年分前金二十銭

広告料 一回一行十八字詰二十銭

大正三年十月十六日印刷 同十月二十日発行

東京市小石川区指ヶ谷町三番地

発行兼編輯人 白倉甲子造

同所 番地

印刷人 渡辺政太郎

同所 番地

印刷所 進々堂印刷所

同所

発行所 微光社

第二号「編輯便り」には「執筆者が田舎で、発行所が東京と云うので、一寸おかしく感ずる方もあります、これは種々手続きの都合上なので執筆者は左記の所に居るのですからドシドシ御投書あらん事を、また御通知を願いたい。埼玉県北足立郡片柳村字東新井微光社」とある。東京小石川の場所は発行人の渡辺の所番地であり、埼玉県片柳村の場所は白倉甲子造の所番地である。

以上の点から見てもすでにかなりはつきりするように『微光』を出すにあつてその主役をつとめたのは白倉甲子造である。白倉甲子造が『微光』を出すに至つた事情を知る前に、まず彼の略歴を示そう。^(註1)

明20・10・20 埼玉県北足立郡片柳村(現大宮市) 大字東新井三

『微光』総目次と解説

37・3

二三ノ二に生る。生家七町歩の地主兼自作農。早稻田中学卒業。

40・10・20

『社会新聞』に「埼玉県東新井より」を投稿、北足立郡甘藷商組合が農民より俵代を徴収することに抗議。

40・末

週刊『社会新聞』に維持金として一円寄付。

41・3・18

『東京社会新聞』へ一円並に上茶一包を寄付。

41・4・25

『東京社会新聞』に「貧乏は不道德也?」を投稿。

41・5・15

『東京社会新聞』に「一戸十九円」を投稿。

41・5・ごろ

『東京社会新聞』へ四十七銭を寄付。

41・6・15

『社会新聞』に「同志の声」を投稿。

41・11・12ごろ

社会新聞社及び世界婦人社へ、さつまいも各一俵を寄付。

42・1・5

本郷区金助町でおこなわれた社会主義青年団新年宴会に出席。

42・1・5

『世界婦人』に投稿(手紙)。

42・1・初旬

『平民夜学会』作る。

42・1・15

『平民の友』に「くらしを案にする法」を發行。

42・1・23

右著發行禁止及び差押処分を受く。

42・6・ごろより

常時尾行の大宮署の巡查二名つく。大正五、六年までつづく。

43・5・上旬

赤羽一「農民の福音」を發行し逃走中一泊す。『乱雲驚濤』と題する赤羽の草稿を受取る。

四七 (二九二)

大3・10・20 弟静造、渡辺政太郎と共に月刊紙『微光』第一号発行。

3〜4ごろ 大杉・荒畑らの新聞発行計画に対し五十銭を寄附。
4〜5ごろ 運動がつづけられず、農事と読書の生活に入る。

今日健在。

この略歴からもわかるように白倉甲子造は明治社会主義者の一人であり、大逆事件後の冬の時代のなかにあつて、なお節を曲げなかつたものの一人である。白倉は堺利彦らの出していた「へちまの花」が送られてきたとき「生きていてよかつた」ということと「シツポをつかまれない」ということを同時に瞬間に感じたという（筆者のききとり。いか「談」と省略）。またこの『へちまの花』が刺激になり自分でもなにか出そうと考え、それが『微光』発行になつた（談）。

『微光』は毎号三千部印刷したが、一回印刷し発行するのに十五円の資金が必要であつた。その十五円は白倉一人で全額負担したが、それは米一俵売れば十分であつた。この土地の三大地主の二番目の地主の長男として生まれ、数え年二十三歳の時から土地の監視をしてきた白倉にとつては『微光』を一号出すごとに一俵の米を売るのはそう苦しいことではなかつた。社会主義を信奉する彼は、他の地主の半分の年貢しか小作人からとらなかつたので小作料として入つたのは田圃から米百俵、畑から六十円の金納であつた（談）。

三千部の『微光』は、ほとんど渡辺政太郎により各地の同志に配布された。白倉は金を出し、原稿を書く方だけをやり配布にはタッチしなかつた。第九号で廃刊したのは、役場につとめている白倉の

父に圧迫が加わり、父に泣きつかれて止めたのであつて、資金的に困つたのではなかつた（談）。なお、白倉の家の中に村役場があり、父はこの書記、白倉の妻の兄は収入役であつた。^(註2)

註1 白倉の略歴については前掲「埼玉県労働運動史（戦前篇）」（六二―三頁）、及び社団法人中小企業労働福祉協会「白倉甲子造氏略歴」（昭和三十九年五月）による。いずれも渡辺悦次氏の労作。

註2 白倉甲子造の伝記はわれわれ同学の者によりまとめている。近く刊行する予定である。

四、『微光』の思想

すでに述べたように「特別要視察人状勢一斑」には、『微光』は「貧富ノ懸隔労働問題ニ関スル記事ヲ掲ケ」とある。社会主義者の発行するものであるから貧富の懸隔、労働問題について論ずるのは当然なことであるが、時代はそれを率直に表現できるものではなかつた。

発刊の辞

大抵、何か発刊すると其の雑誌の立場を明らかにする為めに何か書く、そこで本誌も、また人並に書くことゝした。

印刷所の進歩が此の頃は非常に眼立つて来て、草深い田舎の隅にも何かの印刷物が必らずある、又、新聞、雑誌などの数はウジヤ／＼する程あるので、本誌の如きが其仲間入を為したらば、又かトウンザリするかも知れないが、何うせ数の有りついでだ、読者のお慰み、鼻紙の代用位には成るで有らうと情けない様な此の

雑誌を出すことゝした。

比の雑誌の目的は、田舎の青年、少年達の遊び道具として、出来たものであるから、マア無主義、無方針とでもいう訳である、可成り思い切つてフラ／＼乎とした雑誌である。

併し本誌は他の雑誌と違い決して他から手を出されることはない、一言一句執筆者が責任を負うて書くのである、貧弱な頭からヒネリ出すのであるからお氣に向かぬことが無いでもない。其の節は切に読者諸君のお教を希う。

白倉甲子造誌

「新聞、雑誌などの数はウジャ／＼する程あるので、本誌の如きが其の仲間入を為したらば、又かとウンザリするかも知れないが、何うせ数の有りついでだ」というところは、『へちまの花』創刊号の「序」(堺利彦)の冒頭の「文学雑誌という者は殆んど数えきれぬほどある。其上に又一つふやすのかと思えばウンザリするが、然し百あるものが百一つになつたからとて、重荷に小付、大した邪魔にもなるまい」という文字と似ている。

それともあれ、『微光』は田舎の青年、少年達の遊び道具として出来たものである、「マア無主義、無方針とでもいう訳である」と「発刊の辞」で述べているが、いうまでもなく無主義、無方針で『微光』をはじめたわけではない。白倉甲子造の談を待つまでもなく「この頃は、社会主義の思想や方針を出せるものでなく、余計な弾圧を避けるために無主義、無方針というカモフラージュをした」

(談)のであつた。創刊号の「編輯便り」には「元来此の雑誌は田舎の青年が農業の合間合間に観、聞いた感じや、僅かに読書から得た貧弱な知識を以て楽しみ半分に出来た云わば手習い草紙なのだ」とあるが、これも弾圧の手を逃れるための煙幕である。『へちまの花』は『微光』第一、二号を紹介して「小雑誌の仲間には文学的の者と宗教的の者が多いが、是は社会趣味の多い所が特色だ」と評した。「社会趣味」とは社会的な問題に関心をよせている、ということであろうが、まつたくその通りでただの「無主義、無方針」あるいは「手習い草紙」ではない。

たとえば創刊号「愛の話」(第一面掲載)では、男女の愛を語るかのごとき筆運びではじまり、後半から「スウイデンで大同盟罷工を遣つた時に、合衆国から大した金品を送つたと云う、木内宗五郎は下総佐倉領三百八十九ヶ村の爲め磔刑に遇たという、皆、之れは自身よりも人類を愛したからである」と「社会趣味」に転じ、結論は「尊き愛と云うのは、相思の男女を自由に抱合せしめよ、人をして貧に泣しむる勿れ、人間に大なる争いを絶たしめよ」となつている。これだけのことを社会主義者のレットテルをはられた者が冬時代に主張している『微光』は、『へちまの花』の主張より鋭いことはあつても、『へちまの花』以下の主張しかなかったということはない。

第二号巻頭の「慾の話」も、「第一に吾人は充分の食物と適度の労働とを要求する、第二には総ての肉体の自由と、心意の自由とを望む。第三には互に相愛する男女の交りに就いて家庭内の圧迫に逆

らう。是れで何とやら人間一疋が生きて行かれそうである」とまづ三つの慾を分類する。そして第三の男女の自由な交りから説きあかし、第二の慾に言及するといふつぎのように説明する。すなわち「第二の如き慾を考えると頭の中から出て来るものは平和と云う字である。人類が隣同士で喧嘩ばかりして居るのも他から見てもあまり好ましいことではない。人類の最後の目的とする所は喧嘩ではない又其のために生きて居るのでも無ければ夫れを製造して居るのでもない、とすると家とか国とかの垣を取つてしまつて(精神的にし)ノンビリとした心持で勝手気儘に遊べる様にしたのではないか。改めて云うが、平和の慾を増長させることが肉体にも又精神にも自由を得る根元となりはせまいか？」と平和の問題にまで言及するのである。また、適度の労働と充分の食物を人間に与えるという第一の点については、いま述べた「平和手段を今少しく大きく拡げて考えると、其所に微かな目的の光りが眼に写る。即ち手前慾を取つて仕舞つて共に働らき、共に喰らい、共に哀しみ、共に楽しむ心が人類の全体に行き渡れば左程難事ではないらしい。重ねて云うが、慎しむべきは自分計り生活して行こう、利口になろう、性慾を満足させようと云う手前慾である、手前慾は引いては人類をも社会をも乱だす原動力となるのである」という。ここでは利己心を押えることを強調しているわけだが、労働と食物に事欠く者に利己心をすてよといつてゐるわけではない。このように慾の話という題のもとに世界の平和、国境の撤廃、持てる者の利己心の攻撃を展開するこの筆法は、「無主義、無方針」から出るものではない。

第三号巻頭の「着物の話」^(註2)は、ただ衣服のことを書いていただけではない。不都合な着物として「人間が人間を着物とすることである。即ち、遊んで居て他の働らいたもので生き行こうと云う、凶々しい考えを何とか名を変え手を変えて働らかせようとする、夫れで昔から種々の名に依つて現われて来たのが主人と家来、傭者と被傭者、治者と被治者等の詞で、巧みに人間をばうて居る」をあげる。すなわち自分では働かないで搾取によつて生きて居る者は人間の着物をきて居るのだ、というのである。このように着物を不平均に着ていて、その差がますます大きくなるかどうか。

「其の爲めに総ての着物が部分／＼に時々ストライキを初めることとなる。山林の乱伐が洪水と成つて人を苦しめ、鉱毒と一緒に成つて人を殺すのも山林が全裸にされた恨みのストライキである。田畑の荒廃に帰する様に成るのも、沙漠の如き田舎の堅くるしき生活から逃れて、花やかな都会の暮しに憧れる青年や、娘の如き、地主の手から逃る小作人や、虎の如き税吏に追わる中流民やの無言のストライキを語つて居るのである。若き男女が各家庭に於て年長者に反抗する様になるのも、自己の時代をのみ考へて、若きものをも其の時代に引込まうとする、压制と放縱の鞭の使用を間違いた時に起るストライキである。傭者と被傭者や、治者と被治者の間としても、日本の現状は目のツンボなる私には分らないが、欧米諸國に於ける工場や鉱山のストライキや、政府反対の騒ぎなどが時々新聞紙に見えるのを持つてしても、其の間柄が円く行かないのであろう。第一彼等が生意氣千萬にも富豪や政

府に向つて要求するのも彼等に取つては尤も必要な且つ無ければならぬモノが欲しいからである、即ち着物が欲しいからである。

と社会を批判すること及びしい。「斯う考えて来ると、自然の着物は人間を幸福に導きこそすれ、決して人間を禍いせぬ、唯、人間が猴智恵を出して製らえた着物のみが人間を苦しめる様だ」という。これは明らかに現社会の批判、現社会の改革をめざす視座から放たれる言葉である。

第六号巻頭の「夢の話」は白倉甲子造の理想国像を夢に託して書いたものといえよう。

〔前略〕一見して温和な老人と詛る様な態度で微かに笑を持つて私を見た、『俺は此の部落での老人だが、君の云う賃銀と云う言葉は俺の祖父時代に用いた甚だ妙なものと云われて居つた、詞である、併し君の様な二百年も古い詞を使うては今一寸俺でも訳かるまいから、今日はユツクリ休んで明日になつたら話して遣うよ』と其夜私は寝ることが出来なかつた、朝の気笛(マツ)で床を出ると、向うの小屋からズツ／＼と変な音がする、事務員に聞くとは是れは朝飯前に二十歳から三十歳の男女が縄や蓆を織つて居るのだと云う、夫では其の外の男女は何うするかと聞くと、二十歳以下の男女は自分の好む学問を学ぶのである、併し夫も無理に学ばないでも宜いので、其の變りに野良仕事を手伝わねばならぬ、又三十歳以上五十歳以下の男女は今日の仕事の準備をする、斯くて三十分の後には二十歳より五十歳迄の男女が田圃に働らくのである、スルト二十歳位で総ての学問は仕上るものかと聞くと、ニヤリと笑つ

『微光』総目次と解説

て、左様七歳より十三ヶ年間には大抵は覚えて仕舞う、尤も教師は教多くは入用ないから、先づ三四十人に一人も居れば沢山だ、又好くしたもので、教師様より働らく方が面白いと云うので、大抵は労働者になるので教師になる人を選挙する様なことが起る、選挙された人は仕方が無いから、人類の幸福を増す学問を撰んで、十年或は十五年も勉強する、で村に帰つて児童を教育するのだ、教師の年頃はだ抵五十歳位で休めるのだが、中には面白からうと云うて自分の研究の傍ら六十歳以上も務めて居る者も少くない、次に三階の屋根の上に一寸五十坪の広場になつた処に案内されて、語るには、向うの丘の麓に五六の建物が学校である、初め四年間は初歩の学を教え、次の五年間で高等科の学問を教え、末の年限には自分の好きな科目を教わることとなる。是れは大変の次第で、私には少しも訳らなくなつて来た、次に聞いたのは農業のやり方である、其答には、以前は馬を用いたが今では専ら自動車を用いたために三倍も仕事が出来る様になつて来た、ために男女の働らき時間は朝七時より正午迄で沢山だと云う、皆が働らくと云うことが私には妙に聞えるので、何処の家が一番の働らき者と聞くと、何だと怒り出して、貴様は地球上のモノであるまい、地球上の人類が左様なことを云う筈がない……ポカツ……ポカツアア痛い目が醒めた。」

というものである。

『微光』はこのように社会批判を含んでいたので当局は『微光』読者に対して干渉をしはじめた。「近頃『微光』は危険思想の鼓吹

者だからアンナものは読まぬ方が宜いと、御親切に触れ廻つて呉れるお役人様があるそうだが、随分御苦労のことだ^(註3)、というのがそれである。干渉は読者だけではなく臼倉甲子造の父にまで及びついに『微光』の廃刊となつたことはすでに書いたところである。

註1 「小雑誌仲間」(へちまの花 第十一号 大正三年十二月一日)

註2 「着物の話」には執筆者名がないが、これは臼倉甲子造の書いたものである(談)。

註3 第六号(大正四年三月二十日)の「編輯便り」

五、読者の反響

『微光』にのつている読者からの便りを読むと、この時代の重苦しさが手にとるようになる。

○『微光』発刊の辞に我等は無主義、無方針の雑誌を発刊すると、ア、斯く言わねばならぬ同人諸兄の感慨如何に……その深き奥底には愛の涙あり、打てども割ることなき義の扉あり、而して其処に希望の光明、死すとも生くる永遠の生命あるを。(東北の小都にて^(註1) 花村生)

○『微光』御患送被下難有御礼申上ます、誠に可愛らしい児が出生れましたねえ、いくら丈夫の児でも余り戯悪児の、虫持で、早死したりしてはつまらん、それより弱い児でも無事に成人した方がいね。成人してからは勝手放だいをするだろうから。

(千駄ヶ谷の住人、斎藤兼次郎^(註2) 老生)

○光は快よいものです。しかし目のわるい私にはあまり眩しい光

は見たくない。闇中に微しばかりの光を認めるのはいかに嬉しく、またそれはいかに美しいものでしょう。微光はやがてどこかに大光の国あることを偲ばせます。しかし私は何より先きに私の堪え得るそのやさしい光線で心中の闇を照らさねばならぬ。(大阪府柏原、高田集藏^(註3))

○ちり／＼ばら／＼になつた昔しの友達に此の微かな光のお蔭で逢うことの出来るのはドンナに嬉しいか解りません。(以下略)

(警城相馬、孤峰生^(註4))

○(前略)『微光』は微々たりとも火が燃えています。この火微々たりとて馬鹿には出来ません。燎原の火も燧石の一撃或は一本のマツチから起るのです。一困一流の際会するときは如何なる大結果を生ずるか、真に不可測です。(以下略)(五月四日、在公国、石川三四郎^(註5))

以上、読者の便り五通をぬきだしてみたが、これだけ見ても暗い谷間のなかで見出した一つのかすかな光にたいして生きのこりの社会主義者たちがどれだけの歓喜を覚え、それに期待したかがわかる。また歓喜と期待が大きければ大きいだけに、受難の時代を『微光』がはたして乗り切れるかどうかという心配も大であつたことがありありとあらわれている。なお、片山潜からの通信を全文つぎに掲げておこう。

拝啓貴下御気嫌よく益々御奮闘の事社会のために賀します。前日は御発行の雑誌を有り難う存じました。我々今日の境遇は実に困

なる境遇です。然し主義や思想のために斯る境遇にあると思えば又其の内に無限の趣味と一種の慰安とが見出されます。社会の進歩は仲々早い。欧洲戦争は人類の上に多大の経験と教訓とを与えることと存じます。次に僕は渡米後は当桑港の労働界に身を投じて其の内情を实地に研究して居ます。排日運動は今や上流社会に波及して寧ろ労働社会は無事です。日米戦争のあるまでは無事でしょうから御安心を乞う。皆様に宜しく、右御雑誌御送附のお礼かたぐい一寸申上げます。益々御自愛御奮闘を祈る。

米國桑港 片山 潜

註1 第一号

註2 第一号 斎藤兼次郎は大逆事件を生きぬいた社会主義者。

註3 第四号 高田集蔵は『村落通信』の編集者。

註4 第六号

註5 第九号 なお石川三四郎の手紙は前掲『埼玉県労働運動史 戦

前篇』(六〇頁)に一部が掲載されている。

六、執筆者名その他

K生もしくはKは臼倉甲子造(ウスクラカシゾウ)であり、碧浪もしくは碧は臼倉静造の筆名である。北風生もしくは北風は渡辺政太郎である。また草水山人は渡辺、野枝は伊藤野枝である。伊藤野枝は臼倉とは交際はなかつたが渡辺が原稿をもらつて来ただろうという(談)。

臼倉甲子造は今日埼玉県大宮市に健在であり、『微光』は臼倉の

所蔵していたものである。

(後記) 論文の形をとるために文中臼倉甲子造氏の敬称を省略させていただきます。本論文発表のために臼倉氏と総同盟五十年史編集所の渡辺悦次氏の絶大なる協力を得たことをここに特に記したい。ことに渡辺氏の協力には深く感謝したい。